

ODIP 4.2 修正パッチ (P1040207005786) リリースノート

2024/1/26

(株) インテリジェント・モデル

ODIP は、(株) インテリジェント・モデル社の登録商標です。

本書に掲載された情報に基づいた行為の結果として発生した損害、利益の損失、経費などについて、(株) インテリジェント・モデルならびに本書の製作関係者は一切の責任を負いません。

本書は著作権法上の保護を受けています。本書の一部あるいは全部を無断で転載・複製することは法律で定められた場合を除き、禁止されています。

目 次

A. 変更内容 .....	4
1. ロード処理関連ファイル名の改定 .....	4
2. その他の修正 .....	5
B. バージョンアップによる影響 .....	5
C. パッチの適用方法 .....	6
1. ライブラリファイルの更新 .....	6
2. パッチ適用後の確認 .....	6

## A. 変更内容

### 1. ロード処理関連ファイル名の改定

ロード処理で ODIP が自動的に作成するデータファイル(.dat)、制御ファイル(.ctl/.fmt)、ログファイル (.log)、不良ファイル (.bad) それぞれのファイル名を変更しました。

#### (1) オプションの追加

以前のバージョンと互換性を保つために、次のオプションを設定ファイル (odip.ini) に追加しました。job.loader.filename の既定値は random です。tablename を指定すると、以前のバージョンと同じ動きになります。job.loader.delete.log.file の既定値は false です。

odip.ini の追加オプション

オプション	説明
job.loader.filename = [ <b>random</b>   tablename ]	DBMS が提供するローダを使用する際のデータファイル、制御ファイル、ログファイル、エラーファイルのファイル名の取得方法を指定します。このオプションは、以前のバージョンの動作を再現したい場合に使用します。
job.loader.delete.log.file = [ true   <b>false</b> ]	DBMS のローダによるロード処理後に、ロードログファイルを削除するか否かを指定します。 true を指定すると、ロード処理の正常終了後に、データファイル以外の DBMS のローダが出力するログファイル、不良ファイルを削除します。

#### (2) ロードファイル名の変更

##### ① random

JavaVM の API で提供される、ランダムな一時ファイル名を使用します。一時ファイル名は、例えば"odip123456789012456.dat"のように"odip"で始まり、文字列とランダムな数字の組合せになります。一時ファイル名はロードファイルの出力先ディレクトリ内で一意性が保たれます。このオプションを指定することで、同じテーブルへのロード処理を同時に複数実行しても、ファイルの競合によるエラーは発生しません。同じテーブルへのロード処理が複数同時に実行される可能性がある場合、random を指定

してください。

## ② tablename

例えば“A00000001\_1.dat”のように、ロード先のテーブル名に日時、連番など必要な識別子を付加したファイル名を使用します。このオプションを指定すると、同じテーブルへのロード処理を同時に複数実行した場合に、タイミングによってはファイルの競合によるエラーが発生する場合があります。このオプションは、以前のバージョンとの互換性を維持したい場合に指定します。

## (3) ログファイル名、不良ファイル名の変更

ロード用一時ファイルの変更に合わせて、ロード処理で作成されるログファイル、不良ファイルなどの、拡張子を除いたファイル名をデータファイルと同じ名前に変更しました。また、`job.loader.delete.log.file` を true にすることで、ロード処理の正常終了後にログファイル、不良ファイルなどを削除します。以前のバージョンでは、これらのファイル名は前回実行時のファイル名と同じになることが多く、実行時に上書きされていました。本改定によって、実行ごとにユニークなファイル名のファイルが作成されます。自動的に削除することで、ディレクトリ内にこれらのファイルが残存することを防ぐことができます。

## 2. その他の修正

- (1) JVM モードのジョブを複数同時に実行すると、タイミングによってジョブのキャンセルができなくなる問題を修正しました。このとき、`showserver` のジョブ一覧に対象のジョブが表示されなくなる問題も合わせて修正しました。
- (2) COBOL 固定長ファイルへの出力で `SUBSTRB` 関数や `CONCATB` 関数などを使用する場合、データソース情報で設定したエンコーディングが使用されず、期待したバイト数での切り出しなどが出来ない問題を修正しました。

## B. バージョンアップによる影響

既存の定義への影響はありません。

## C. パッチの適用方法

本パッチは、次の ODIP 製品に適用してください。

- ODIP アドミニストレータ v4.2
- ODIP オペレーションマネージャ v4.2
- ODIP リポジトリマネージャ v4.2
- ODIP プロセスマネージャ v4.2
- ODIP リポジトリサーバ v4.2
- ODIP トランスフォーマ v4.2

### 1. ライブラリファイルの更新

実行中の ODIP 製品を終了し、ODIP\_P1040207005786 フォルダに格納されているライブラリファイルを、表 1 のファイルのコピー先に上書きコピーしてください。

表 1 ODIP\_P1040207005786 のフォルダ構成及びファイルのコピー先

ODIP_P1040207005786	ファイルのコピー先
lib	
ADM	ODIP アドミニストレータの lib フォルダ
OPE	ODIP オペレーションマネージャの lib フォルダ
RPM	ODIP リポジトリマネージャの lib フォルダ
RPS	ODIP リポジトリサーバの lib フォルダ
TFM	ODIP トランスフォーマの lib フォルダ

### 2. パッチ適用後の確認

パッチ適用後は、各製品を起動し、表 2 の確認方法に従って確認を行ってください。

表2 パッチ適用後の確認方法

製品名	確認方法
ODIP アドミニストレータ	ヘルプメニューから“ODIP について”を選択し、表示されたすべてのビルド ID が 1040207005786 であることを確認してください。
ODIP オペレーションマネージャ	
ODIP リポジトリマネージャ	
ODIP プロセスマネージャ	
ODIP リポジトリサーバ	ODIP リポジトリマネージャのツールメニューから"ORMS サーバ情報"を選択し、表示されたすべてのビルド ID が 1040207005786 であることを確認してください。
ODIP トランスフォーマ	ODIP トランスフォーマを起動し、showserver コマンドを、オプションに“-info version”を指定して実行してください。表示されたすべてのビルド ID が 1040207005786 であることを確認してください。

以 上